

〈研究ノート〉

マネトン『エジプト史』とヘレニズム世界

—プトレマイオス朝エジプトにおける歴史認識の変化—

星野宏実

はじめに

前3世紀、エジプト人神官マネトンはプトレマイオス朝支配下でエジプトの通史をギリシア語で記した。これが『エジプト史 Αἰγυπτιακά』である。王朝時代¹⁾のエジプトの歴史は、既に前5世紀のヘロドトスによって語られるが、固有の言語を持つエジプト人が、当時の支配者層の言語であるギリシア語で著書を記したという点において、このマネトンの『エジプト史』は初めての例であると言える²⁾。

『エジプト史』のオリジナル・テキストは現存しない。しかし、その内容は、ユダヤ人の祖先として位置づけられる「ヒクソス」や、「出エジプト」についての逸話を伝えることから、後世のユダヤ教・キリスト教著作家たちによる関心を集め、彼らによって引用されてきた。これらの断片的な引用を19世紀に入り C. Müller が収集し、王朝毎に列挙する形態で『エジプト史』を再構成した³⁾。続いて20世紀に、W. G. Waddell が『エジプト史』の断片を英訳、F. Jacoby がさらに著者マネトンに関する断片を加えて、オリジナル・テキストの再構成を行った⁴⁾。今日の我々は、主にこの三者による再構成から『エジプト史』の大まかな全体像を知ることができる。

マネトンは、『エジプト史』においてまず神々によるエジプト支配について述べ、その後300人を超える人間の「ファラオ」について記述し、彼らを王朝 *δυναστεία* に分けた。この中で、マネトンはファラオの名前を彼独自のギリシア語名に翻訳している。そのため、『エジプト史』で記される王名は、現在一般的に認識される名前、すなわち王の「誕生名」とは一致せず、一見した限りでは、マネトンの示す王が我々の認識するどの王に対応するのか、読み取ることが困難である⁵⁾。しかし、A. H. Gardiner が「エジプト学者はマネトンの30の王

1) 本稿において「王朝時代」は、表①に示した前3100年頃の上エジプト統一から、前332年のアレクサンドロス大王による征服までの、いわゆる古代エジプト諸王朝の時代を指すこととする。なお、本稿の年代表記は *Cambridge Ancient History*, 3rd ed., vol. 1, part 2 - vol. 6, Cambridge 1971-1994 に準ずる。また、史料略号は、S. Hornblower and A. Spawforth (eds.), *The Oxford Classical Dictionary*, 3rd ed., revised, Oxford, 2003 による。

2) P. M. Fraser, *Ptolemaic Alexandria*, Oxford, 1972, p. 510.

3) C. Müller, *Fragmenta Historicorum Graecorum*, ii, 1848, pp. 512-616.

4) W. G. Waddell *Manetho*, Cambridge, MA., 1940; F. Jacoby, *Die Fragmente der Griechischen Historiker*, Leiden, 1958, 609.

5) 王朝時代のファラオは、五重称号と呼ばれる以下の5種類の名前を持った。①ホルス名、②ネプティ（二女神）名、③黄金のホルス名、④ネスト・ビティ（上下エジプト王）名〔即位

朝の枠組みから解放されない」と述べるように、『エジプト史』の王朝区分は現在のエジプト学に引き継がれ、その年代指標の根本を形成している⁶⁾。

それ故、従来『エジプト史』は王朝時代との関連から論じられる傾向にある。古代エジプトでは、マネトンの登場前からヒエログリフ（神聖文字）やヒエラティック（神官文字）で記される王名表が作成され、その内のいくつかは現在も確認することができる。D. B. Redfordは、こうした王朝時代の王名表の分析を行う上で、その系譜について考察し、そこにマネトンの『エジプト史』を位置づけた⁷⁾。また、G. P. Verbrugghe と J. M. Wickersham は、改めてマネトンと『エジプト史』に関する情報を整理した上で、マネトンが王朝時代の王名をギリシア語へいかに翻訳したのかを考察し、その翻訳方法に一定の基準を見出している⁸⁾。以上のように、マネトンの『エジプト史』は王朝時代の王名表の伝統を継承した作品として捉えられ、エジプト学の分野において重用されている。

このような事情から、『エジプト史』は王朝時代についての歴史伝承の翻訳物として長く認識されてきた。その結果、年代指標の史料としては活用されるものの、ヘレニズム時代の作品としては議論の対象とされない傾向にあった。例えば、藤縄謙三はマネトンの『エジプト史』について、ヘレニズム時代におけるギリシア文化の波及に伴い、自国の歴史伝承をギリシア語に訳した作品であると位置づけている⁹⁾。また、秋山慎一も、王朝時代に成立したトリノ王名表との比較において「それがエジプト語で書かれているか、ギリシア語で書かれているか」の違いだけであると述べている¹⁰⁾。山中美知は、『エジプト史』の後世の作家による受容を考察し、聖書との関連から同作品が重用されてきたと述べ、「古代エジプト王朝史」としての『エジプト史』の価値について論じている¹¹⁾。以上のように、日本国内において『エジプト史』は、ヘレニズム期に成立した作品として認められつつも、その側面が論じられることは少なく、王朝時代を扱う年代記としての面が取り上げられることがほとんどである。

しかし近年、従来論じられることのなかった『エジプト史』のギリシア的側面が、J.

名]、⑤ラーの息子名[誕生名]である。[誕生名]は王が即位する前から持つ、個人に対して付けられた名前である。大島一穂「ホルス神とセト神の争いの神話と「二つの国の統一」』『史泉』、第59号、1984年、47-48頁。屋形禎亮「古代エジプト」『オリエント世界』岩波書店、1998年、34-35頁。

6) A. H. Gardiner, *Egypt of the Pharaohs*, Oxford, 1961, p. viii. (以下、Gardiner, *Egypt of the Pharaohs* と略す。)

7) D. B. Redford, *Pharaonic King-lists, Annals, and Day-books: a Contribution to the Study of the Egyptian Sense of History*, Benben, 1986, pp. 336-337. (以下、Redford, *Pharaonic King-lists* と略す。)

8) G. P. Verbrugghe and J. M. Wickersham, *Brossos and Manetho, Introduced and Translated*, Michigan, 1996.

9) 藤縄謙三『歴史学の起源—ギリシア人と歴史』力富書房、1983年、37頁。

10) 秋山慎一「古代エジプトにおける王名表伝承と王朝概念」『西洋史論叢』、22号、2001年、56頁。

11) 山中美知「マネトン再考—古代エジプト王朝史記述とその受容—」『地域研究』、28巻、2007年、37-49頁。

Dillery と I. S. Moyer によって着目されている。Dillery は『エジプト史』の中に確認されるギリシア世界についての記述を「シンクロニズム」として着目し、マネトンは『エジプト史』を執筆することで、ギリシアとエジプトの過去を繋ぎ合わせようとしたと論じる¹²⁾。また、Moyer は、『エジプト史』の内容とプトレマイオス朝の政策との関連性が指摘できる点から、彼が『エジプト史』によってギリシア系の新王権とエジプトとの橋渡しを行う役目を担っていたと推測した¹³⁾。このように、現在『エジプト史』については、新たなアプローチが試みられ始めている。そこで本稿では、マネトンと『エジプト史』について改めて整理した上で、なぜ『エジプト史』が翻訳物としての扱いを受けてきたのかを探り、さらに近年の議論を取り入れ、ヘレニズム期に成立した作品として『エジプト史』の本来の性格を明らかにしていく。

第1章：マネトンと『エジプト史』

第1節：マネトンの人物像

マネトンの名前については、史料によってマネトース *Μανεθώς*、マネトーン *Μανέθων*、マネトー *Μανεθῶ*、マネトート *Μανεθῶθ*、マネトス *Μανεθός* と記され、表記が一致しない。これらの名前について、J. G. Griffiths, Redford らはエジプトの神トトの名前を含み「トト神の真実」、「トト神を見る者」、「トトの最愛の者」や、「ホルスの羊飼い」、「馬丁」や、「神殿の羊飼い（すなわち守護者）」の意味があると分析する¹⁴⁾。何れが正しいかはマネトン自身について語る史料が少ないため、断定が不可能である。本稿では、カルタゴ出土碑文¹⁵⁾の *Μανέθων* という表記に従うこととし、日本語表記については、ギリシア語特有の音引きを省き「マネトン」とする¹⁶⁾。

後1～2世紀のプルタルコスや、後述する8世紀のシンケルスは、マネトンについてセベンニュトス出身の人物であり、さらに太陽信仰の中心地であったヘリオポリスの高位神官であったと伝える¹⁷⁾。彼について最も知られる記述は、プルタルコスの『モラリア』における

12) J. Dillery, *Clio's Other Sons, Berossus and Manetho*, Michigan, 2015.

13) I. S. Moyer, *Egypt and the Limits of Hellenism*, Cambridge, 2011.

14) J. G. Griffiths, *Plutarch's de Iside et Osiride*, Cambridge, 1970, pp. 79–80; D. B. Redford, *The Name Manetho*, in L. H. Lesko (ed.), *Egyptological Studies in Honor of Richard A. Parker: Presented on the Occasion of His 78th Birthday, December 10, 1983*, Hanover, 1986, pp. 118–21; Verbrugge & Wickersham, op. cit., pp. 95–96; Moyer, op. cit., p. 85, n. 5.

15) CIL VIII 1007.

16) 本稿において、マネトンについては音引きを省いた形で統一するが、その他人物名については史料上の差異を明確にするためにも、ギリシア語の長母音で表記される箇所は長音のまま音引きを使用している。

17) Waddell, op. cit., App. 1 (Syncellus 73) シンケルスによるこの証言は、プトレマイオス2世フィラデルフォスに「*σεβαστῶ*」の敬称が使用されることから、時代錯誤であると指摘される。しかし Waddell の見解によれば、シンケルスによって伝えられるこの証言は、信憑性のある史料に基づくものであり、且つ、当時ヘリオポリスは神官たちの活動地域として知られており、マネトンの活動の場をヘリオポリスと考えることは妥当であるとする。Cf. Waddell, op. cit., p. xi.

次の逸話である。

プトレマイオス・ソテルは夢の中でプルトンの像を見ました。彼はそれまで本物を一度も拝んだことがなかったので、それがどんな像であるのかは知りませんでした。…(中略)…そして運ばれてきたのを検分した結果、神託や前兆の解釈者であるティモテオスと、ナイル河口セベンニュトスのマネトン、および彼らの一統の者たちが、これはプルトンの像だと断定しました。その根拠となったのは、番犬ケルベロスと蛇を伴っていることでした。そして王はこの二人の説明から、これはサラピス以外の何者でもない と確信したのでした。…¹⁸⁾

この逸話は「アレクサンドリアへのサラピス神の到着」として知られ、サラピス神がギリシア的外見の特徴をもってアレクサンドリアにおいて信仰されるに至った経緯を語る¹⁹⁾。P. M. Fraserによれば、これはプトレマイオス1世ソテル治世晩年の前286/5年、もしくはプトレマイオス2世フィラデルフォス治世下の前277/6年の出来事である²⁰⁾。この逸話の中で、マネトンはアテナイのティモテオスと並んでプトレマイオス朝宮廷における助言者として登場する。ここで語られるマネトンとサラピス信仰との関わりは、カルタゴのサラピス神の神域において、記念碑の台座にマネトンの名前が刻まれていたことから裏付けられる²¹⁾。ここから、マネトンは、新王権によって新たな宗教政策が試みられた場面で描かれるほどに、エジプトの高位神官として政策に影響を与え得る地位にあったと推測できる。

『エジプト史』については、シンケルスによってプトレマイオス2世へ宛てた作品であることが証言される²²⁾。この証言を基に『エジプト史』の執筆は、プトレマイオス2世治世下の前285～前246年であるとの見解が一般的であり、プトレマイオス1世と2世の親子二代の治世に渡り、マネトンが王家に近い立場であったことが推測される。マネトンの名前は、その後のプトレマイオス3世治世である前241年のパピルス文書からも発見されている²³⁾。こ

18) Plut., *Mor., De Is. et Os.*, 361F–362A. 本稿では柳沼重剛訳(プルタルコス『エジプトの神イシスとオシリスの伝説について』岩波書店, 1996年)を使用する。しかし一部、本稿に即し表記を変更した。なお、同じく「アレクサンドリアへのサラピス神の到着」について同じく扱うタキトゥスは、「エジプト人神官」と記載するのみで、マネトンの名前を挙げていない(Tac., *Hist.*, 4, 83)。

19) サラピス神とは、エジプトの聖牛アピスとオシリス神が融合したオソラピスをギリシア語でサラピスと言い換えたもので、プトレマイオス朝においてギリシア人の壮年男性の姿で表されるようになった。外見的特徴はギリシアのゼウス神を模っており、頭上にハデス神の特徴である枡を乗せている。大戸千之「ヘレニズム時代における文化の伝播と受容—地中海東部諸地域におけるエジプト神信仰について」『古代地中海世界の統一と変容』青木書店, 2000年, 99–101頁。

20) Fraser, *op. cit.*, p. 505.

21) CIL VIII 1007.

22) FrGH, 609, T11c (Syncellus, p. 29, 8).

23) FrGH, 609, T4 (Hibeh Papyri I. 72. 4ff).

の文書には具体的な役職や立場は明記されないが、ここから、マネトンがプトレマイオス朝初期の三代に渡って活躍した人物であると想定される。

マネトンの著作には『エジプト史』の他にも、『ソティスの書』、『聖なる書』、『自然学説要約』、『祭りについて』、『古代の儀式および宗教について』、『キフィの製造法について』、『ヘロドトス批判』があると言われている²⁴⁾。これらのうち、『ヘロドトス批判』は断片でしか残っていないことから、『エジプト史』の一部であるとも考えられる²⁵⁾。ヨセフスはマネトンによるヘロドトスの批判について証言するが、これが単体の作品を指すのか、『エジプト史』の一部を指すのかは不明である²⁶⁾。『エジプト史』を始め、いずれの作品もマネトンのオリジナル・テキストは存在せず、断片的な引用からのみ我々はその内容を知ることができる。プルタルコスが著書の中で、エジプトの宗教的風習についてマネトンを参照しており、それらは上記の著作を参考にしたものであると考えられている²⁷⁾。ここから、マネトンの著作が後世の著作家によって、エジプトの知識を得る書物として重用されていたと言えるだろう。

これらの史料状況から、プトレマイオス朝の通史を記した G. Hölbl は、マネトンはプトレマイオス 1 世の顧問であり、後にプトレマイオス 2 世の依頼で『エジプト史』を執筆したと述べる²⁸⁾。また、プトレマイオス朝のプロソポグラフィ研究を行った B. Legras は、マネトンの言語能力を評価しており、この能力によって彼は歴史家としての優位性を持ったと指摘する²⁹⁾。さらに、周藤芳幸はマネトンを、エジプト人でありながら「プトレマイオスの宮廷で重用されていた人物であり、在地のエリートと新米のギリシア系支配層との交渉の界面で重要な役割を果たしていた」と評価している³⁰⁾。

以上からマネトンはエジプト人でありながら、新王権の政策に関与できるような役職・地位にあったと言える。こうした彼の立場は、文化的背景の異なる新王権から、上記 8 点の著作に示される彼のエジプト古来の文化に関する幅広い知識が求められたためとも考えられる。さらに、Fraser が「はじめてギリシア語を使用したエジプト人³¹⁾」と評価するように、マネトンは新王権の樹立直後に既にギリシア語を操っていたという点で、極めて稀な人物である。この点において、マネトンはエジプトにおけるギリシア文化受容の先駆的存在であったと言える。しかし、マネトンの人物像については、これ以上に情報を得られる史料が無いため、生没年や宮廷における役職など不明な点が多く、推測の域を出ない。次節では、彼の作品である『エジプト史』に視点を移し、その内容と構成を整理しつつ、『エジプト史』がいかに引用され、現在にまで伝えられたのかを論じる。

24) Waddell, op. cit., pp. xiv–xv.

25) Moyer, op. cit., p. 91, n. 26.

26) Joseph, *Ap.*, 1. 73.

27) Plut., *Mor.*, 354C; 371C; 376B; 380D.

28) G. Hölbl, *A History of the Ptolemaic Empire*, London and New York, 2001, p. 27.

29) B. Legras, Les experts égyptiens à la cour des Ptolémées, *Revue historique*, 4, 2002, pp. 975–977.

30) 周藤芳幸『ナイル世界のヘレニズム』名古屋大学出版会, 2014年, 116頁。

31) Fraser, op. cit., p. 505.

第2節：『エジプト史』の内容と構成

彼の著作の中でも、現代まで最も多くの内容が伝えられるのが『エジプト史』である。前節で述べたように『エジプト史』のオリジナル・テキストは存在せず、後世の作家による引用から再構成が行われている。確認できる最も早期の引用者は、後1世紀のユダヤ人作家フラウィウス・ヨセフスである。その後、2世紀には教会史家テオフィルス、作家アイリアノス、3世紀には哲学者ポルフィリオス、作家アフ리카ヌス、3世紀後半から4世紀前半には教会史家カエサリアのエウセビオス、5世紀にはビザンツの作家マララスが『エジプト史』を引用したが、いずれも断片的な引用が残るのみである。もっともアフ리카ヌスとエウセビオスは包括的な引用を行ったようだが、その著作も現在では失われている。8世紀になってビザンツの修士シンケルスが、この2名の引用を用いて『年代記抜粋』を執筆した。これによって現在の我々はアフ리카ヌス、エウセビオスの引用内容を確認することができる。なお、エウセビオスにはシンケルスによって伝えられる版（以下シンケルス版）と、それよりも早い段階でラテン語に翻訳されたアルメニア版が存在する。シンケルス版とアルメニア版はおおよそその内容は合致するが、第1、3、17～19、26、29王朝に治世年数等の相違があり、完全に一致するものではない。

これらの『エジプト史』の引用は、ヨセフスがマネトンのオリジナル・テキストを抜粋した様式と、シンケルスが伝える（すなわちアフ리카ヌスとエウセビオスが引用する）内容を要約した様式（以下「大要 epitome」）とに分けることが可能である。ヨセフスは、自著『ユダヤ古代誌』を批判するアレクサンドリアの学者アピオンに対して、自身の属するユダヤ民族がいかほどに古いのかを証明するため、さらなる著書『アピオンへの反論』においてマネトンの『エジプト史』を引用した。そのため、彼の引用は『エジプト史』の中でもユダヤ人の祖先とされる「ヒクソス」や「出エジプト」に関連する箇所のみ限定されている。ヨセフスの引用は、王朝時代の第13王朝の末から第19王朝に該当すると考えられ、その内容は次の四つの枠組みに区分される³²⁾。

- (1) トゥティマイオスの治世に始まるヒクソスのエジプト侵攻と略奪³³⁾（ヨセフス、『アピオンへの反論』、第1巻、75–82節）
- (2) アヴァリスへのヒクソス追放と協定（同上、第1巻、85–90節）
- (3) ヒクソス追放以後のファラオの系譜と、セトースと弟ハルマイスによる王位争い（同上、第1巻、94–102節）
- (4) 王アメノーフィスによるレプラ患者の追放と彼らのエジプト襲撃からの国土回復（同上、

32) Waddell, Fr. 42; Fr. 54, n. 1. ヨセフスの引用の四つの枠組みについては、Moyer, op. cit., pp. 120–125.

33) 秦剛平はトゥティマイオスを、第13王朝の王と位置づけている。フラウィウス・ヨセフス（秦剛平訳）『アピオンへの反論』山本書店、1977年、71頁(b)。また、VerbruggeとWickershamは「トゥティマイオス」は「トトメス」という表記が基であり、それが改変されたと指摘する。Verbrugge & Wickersham, op. cit., p. 157, n. 21.

第1巻, 230-250節)

(1)で登場する「ヒクソス」はアジアからやってきたセム系民族である。ここでは第二中間期にあたるヒクソスのエジプト襲来と、それによるエジプト全土の混乱の様子が描かれ、(2)ではそのヒクソス支配からの解放と王権の復活が確認できる。(3)では(2)に続く王たちの系譜が示され、その後、国外遠征中の王セトースと、彼に反旗を翻した王弟ハルマイスとの争いが描かれる。さらに(4)では『旧約聖書』のモーセがレプラを患う神官として登場し、『旧約聖書』とは異なる「出エジプト」の逸話が語られる。ヨセフスによる引用は『エジプト史』の一部をそのまま抜き出したと考えられるが、ヨセフスの著作の文脈にそって使用されるため、同一の王の複数回の登場や、王名表記のブレが確認されている。

一方、シンケルスが伝えるアフリカヌスとエウセビオス両者の「大要」を確認すると、『エジプト史』は以下の3巻で構成される。

第1巻：神・半神の時代, 第1王朝～第11王朝

第2巻：第12王朝～第19王朝

第3巻：第20王朝～第30王朝（もしくは第31王朝）

ここでは神話上の神々による支配の後に、300人を超える歴代のファラオが列挙される。シンケルスの引用するアフリカヌス版第19王朝の項を一例として挙げると、以下の通りである。(下線部は筆者による)

(a)第19王朝は(b)ディオスポリスの(c)7人の王から構成される。

- 1, (d)セトース, (e)51年間。
- 2, ラプサケース, 61年間。
- 3, アメネフテース, 20年間。
- 4, ラメセース, 60年間。
- 5, アメネムネース, 5年間。
- 6, トゥオーリス, (f)彼はホメロスがポリュプスと呼ぶアルカンドラの夫で, 彼の治世トロイアは陥落した。治世は7年間。

(g)合計209年間。

各王朝は時系列に沿って下線部(a)のようにナンバリングされ、その各王朝の項目では、出身地もしくは王権の拠点地（下線部(b)）、そして王朝に所属する王たちの人数（下線部(c)）が明記される³⁴⁾。次に、王の即位順に従って数字が付され、それと共に王朝に所属する王の名前（下線部(d)）が列挙される。なお、王名が省略され、王朝内の王の人数を記すに留まる

34) アフリカヌス版の第19王朝は、項目内で示されるように6人の王で構成されるが、Müllerによれば後世の引用の過程で、「アルカンドラの夫」が第7代目の王として数えられたために起きた間違いであるとする。C. Müller, op. cit., p. 518; Waddell, op. cit., p. 148, n. 1 (MSS).

こともある。名前が挙げられる王は、個々の治世年数（下線部(e)）が記されるが下線部(f)のように特記事項が記載される例も確認できる。この特記事項については、個々の王の特徴や死因、軍事活動や建築事業、宗教関連事業等の業績、治世中の出来事が記載される。また例のように、その中には、同時代のギリシア世界の出来事や、ギリシア神話の人物に関する記述が確認できるが、その意味するところは第2章第2節において詳述する。そして各王朝の項目の最後は、王朝を通した合計の治世年数（下線部(g)）で締めくくられる。

しかし、Waddellが「断片的であり、ゆがめられている」と述べるように、これらの引用には次の問題点が指摘できる³⁵⁾。第一に、同一テキストにおける王の人数や統治年数の齟齬である。各巻の末尾には、その巻で扱われた王の人数とそれらの治世年数について、其々の総数が記載される。例えば、アフリカヌスの第1巻の最後には、王の総数が共に192名と記載される。しかし、アフリカヌスの第1巻における各王朝の王の人数を合計すると、199名が数えられる。さらに、エウセビオスの二つの版でも、第1巻の巻末で王の総数が共に192名と記載されるのに対し、各王朝の王の人数を合計すると、123名のみである。このように、各巻末で示される総数は、該当する王朝の項目で記された人数の合計とは一致しない。このような齟齬は、上記のような巻と各王朝という大きな範囲のみではなく、一つの王朝内で扱われる各王の治世年数（下線部(e)）の合計と、王朝を通した合計の治世年数（下線部(g)）という小さな範囲でも確認される。こうしたテキスト内の齟齬もまた、『エジプト史』の内容の理解を困難にしているのである。

第二に、引用者による相違の問題がある。アフリカヌスとエウセビオス両版を比較すると、三者の記述内容が一致するのは第10、11、13王朝のみであり、これらは同一王朝内の個々の王については記さず、王の人数、王権の所在地、合計治世年数を記すだけである。その他の箇所については、王名、王の人数、治世年数などの相違が各所に確認できる。特に、エウセビオスの引用には、個々の王朝の項目で王の人数の合計が明記されない箇所があり、『エジプト史』全体における王の人数の総数を計測することが不可能である。その中でも両者の大きな相違は、第15王朝と第17王朝についての混乱である（表②）³⁶⁾。アフリカヌスはフェニキア出身の王たちを第15王朝とするが、エウセビオス両版は第17王朝とする。さらに、アフリカヌスはテーベもしくはディオスポリスの王を第17王朝に置くのに対し、エウセビオス両版は第15王朝に配置する。王名や王権の拠点からも、それぞれ同一の王朝を指していることは明確であり、それをアフリカヌスとエウセビオスの各々が別の時代に配置していると言える。山中はこれらの相違の原因について、両者が共に系統の異なる写本、あるいは異なる要約を使用したためであると述べている³⁷⁾。

35) Waddell, op. cit., p. vii. この点について、Gardinerも治世年数の長さや、引用者での差異によって現存する『エジプト史』は不完全であると指摘する。Cf. Gardiner, *Egypt of the Pharaohs*, pp. 46–47.

36) Redford, *Pharaonic King-lists*, p. 240; 山中, 前掲論文, 43–44頁; Moyer, op. cit., p. 93.

37) 山中, 前掲論文, 45頁。

第三に、「大要」における、古代の著作家による引用時点での二つの加筆である。一つは、第18王朝のアメノーフイスについての記載である。アフリカヌス、エウセビオスともに、この王を「メムノンの巨像」のモデルであり、このモニュメントについて「話す像」としてその特徴的な現象を記述している³⁸⁾。これは、前26年の地震によってアメンホテプ3世の像にヒビが入り、昼夜の気温差によって像が音を発するようになった現象を指すものである³⁹⁾。よって、前3世紀に執筆された『エジプト史』に、この像の「話す」現象が記されるのは明らかな時代錯誤であり、この「メムノンの巨像」についての記述は後世の著作家による加筆であると言える。

もう一つの加筆の可能性は、第31王朝の項目である。この王朝はアレクサンドロスのエジプト支配前、すなわちエジプトの第二次ペルシア支配期（前342～前332年）に該当する。しかし、この項目については、シンケルスの「マネトンが年代記を記したのはネクタネボ（2世）までである⁴⁰⁾」という証言を基に、Waddell 以来の研究者によって問題提起されている⁴¹⁾。ネクタネボ2世（前360～前342年）は第30王朝最後の王、つまりエジプト人最後のファラオである。そのため、第31王朝が加筆であるならば、マネトンはエジプト人による統治の終了で著作を締めくくったことになる。これに対して Verbrugge と Wickersham は、第31王朝がアレクサンドロスとプトレマイオス朝に先立つ王朝であること、またマネトンが外来王朝についてヒクソスやエチオピア出身の第25王朝、第一次ペルシア支配の第27王朝を扱うことから、同じく外来王朝である第31王朝について『エジプト史』で記されていた可能性は否定できないとしている⁴²⁾。この第31王朝についての議論は、未だ意見の一致を見ない。

以上のように、『エジプト史』は広く後世の著作家によって活用されたが故に、引用者による相違や加筆という問題を抱えることとなった。しかしながら、マネトンの『エジプト史』は断絶の無いエジプトの通史を提示したことで、今もなお、エジプト学の根幹としてその存在感を発揮しているのである。おそらく、本来の『エジプト史』にはさらに多くの情報が記されていたのだろう。しかし、引用や要約が繰り返されたことによって、現在に伝わる

38) ルクソールのナイル西岸に現存する第18王朝アメンホテプ3世（前1417～前1379年）の像を指す。アメノーフイスについて、アフリカヌスは第18王朝8代目、エウセビオスは第18王朝7代目に配置する。Cf. Waddell, op. cit., Fr. 52, Fr. 53.

39) 「メムノンの巨像」について最も早期の記録はストラボンに確認できる（Strabo, 17, 1, 46）。Cf. Moyer, op. cit., p. 93; Dillery, op. cit., p. 111.

40) Syncellus, p. 99 (Waddell, op. cit., Fr. 6). なお、訳中の（ ）内は筆者注。

41) 第31王朝を後世の加筆であるとする意見は以下4名が挙げられる。Waddell, op. cit., p. 184, n. 1; Gardiner, *Egypt of the Pharaohs*, p. 453; Dillery, op. cit., pp. 86–87; Moyer, op. cit., pp. 93–94, p. 139. 特に Moyer は、王朝時代のエジプトにおいて「30」という数字が、ひと月の日数であること、王の更新祭が開催される年数であることなどから、重要視されていたことを挙げ、『エジプト史』も第30王朝で締めくくられたと主張する。

42) Verbrugge & Wickersham, op. cit., p. 100. また Manning は、『エジプト史』がプトレマイオス朝直前（すなわち第31王朝）で終えられているため、そこに続くプトレマイオス朝の正当性を打ち出していると指摘するが、彼は「第31王朝」が加筆である可能性について考慮していない。Manning, *The Last Pharaohs*, Princeton, 2010, p. 152. なお、藤縄も第31王朝を『エジプト史』に含めている。藤縄謙三『歴史の父—ヘロドトス』新潮社、1989年、168頁。

までに『エジプト史』の本来の性格が損なわれてしまったのではないだろうか。実は、マネトンの登場前から、エジプトではファラオの歴史を伝える史料が存在した。マネトンの『エジプト史』は、それらの史料とどのように異なり、いかなる意図のもと作成されたのか。本章では、作品中の特徴的な記述に着目し、『エジプト史』の本来の性格を明らかにしていく。

第2章：『エジプト史』の性格

第1節：「聖なる書字板」との比較

マネトンは『エジプト史』の執筆にあたり、何を情報源としたのか。この疑問に答えるのが、ヨセフスの証言である。

「私はまず第一にエジプト人の記録から始めよう。その記録を目の前で示すことはしないが、エジプト人であるマネトンという人物がいる。彼はギリシアの教養を身に着けた人物であった。なぜなら彼（マネトン）はギリシア語で祖国の歴史を、彼が言うように聖なる書字板から訳して書いた。また、彼はヘロドトスがエジプトについて無知であり、間違いを犯していることを非難する⁴³⁾。」

ヨセフスは、マネトンの執筆材料についてこの「聖なる書字板 δέλτων ιερῶν」以外にも、「文書 γραμμάρων」、「聖なる文書 ιερῶν γραμμάρων」、「古代の記録 ἀρχαίαις ἀναγραφαῖς」を著書の中で挙げる⁴⁴⁾。これらに、「聖なる ιερῶν」という形容詞が付けられていることから、ヨセフスはマネトンの執筆材料について、神殿所蔵史料の全般を指していると読み取ることができる。王朝時代からエジプトの神殿には「生命の家」（ペル・アंक）という施設が存在した。ここでは宗教・学術の著作活動や、文書の保管、神殿のレリーフや記念物に刻まれる碑文の製作活動が行われたと考えられている⁴⁵⁾。「生命の家」の設置は、王朝時代のみでなく、プトレマイオス朝期にも確認することができる⁴⁶⁾。マネトンが高位の神官地位にあったことから、Redfordは彼がこうした「生命の家」所蔵の王朝時代からの記録を基に執筆活動を行っていたと推測している⁴⁷⁾。

43) Joseph, *Ap.*, 1, 73.

44) 「文書 γραμμάρων」は Joseph, *Ap.*, 1, 104–105, 「聖なる文書 ιερῶν γραμμάρων」は Joseph, *Ap.*, 1, 228, 「古代の記録 ἀρχαίαις ἀναγραφαῖς」は Joseph, *Ap.*, 1, 287に記載がある。

45) 生命の家の機能については A. H. Gardiner, *The House of Life*, *The Journal of Egyptian Archaeology*, vol. 24, 1938, pp. 159–160 (以下、Gardiner, *The House of Life* と略す。) ; R. B. Finnested, *Temple of the Ptolemaic and Roman Periods*, *Temples of Ancient Egypt*, Ithaca, 1997, p. 228.

46) プトレマイオス3世エウエルゲテス治世に建設が開始されたエドフのホルス神殿、プトレマイオス2世フィラデルフォス治世フィラエのイシス神殿に「生命の家」があったと推測される。Finnested, *op. cit.*, p. 313, n. 139; Gardiner, *The House of life*, p. 177.

47) Redford, *Pharaonic King-list*, p. 227.

先行研究においては、現存する次の6点の史料が『エジプト史』と比較される。最も早期の史料は、第5王朝もしくは第6王朝の成立と考えられる「パレルモ・ストーン」である⁴⁸⁾。これは閃緑岩の厚板に記された王名表であり、第1王朝支配前の先史時代から第5王朝半ばまでの王名が記録される⁴⁹⁾。ここでは、各王の治世における年毎のナイルの水位や出来事が記される。その中でも、第1王朝の河馬の狩猟儀式や、第2王朝の聖牛アピス信仰の創設についての記述は、「大要」における第1王朝初代メネスが河馬に襲われた記述や、第2王朝2代目カイエコススの治世にアピスやムネウイスの信仰が始められたという記述と、登場する動物が共通している⁵⁰⁾。なお、第1王朝の河馬について、パレルモ・ストーンは河馬を狩猟する儀式について記録するが、『エジプト史』のアフリカヌス版では王が河馬に襲われて死亡したことを伝える。Dilleryはこの記述について、マネトンのテキストが誤って伝わったのではないかと推測する⁵¹⁾。『エジプト史』とパレルモ・ストーンにはこうした共通点を確認できるものの、VerbruggeとWickershamはパレルモ・ストーンの扱う範囲が第5王朝までであること、それが年毎の記録の様式をとることなどから、マネトンの直接の資料ではないと推測する⁵²⁾。

時代を下り、新王国時代の神殿や墓にレリーフとしてヒエログリフ（神聖文字）で刻まれた王名表も『エジプト史』との比較が可能である。カルナックのトトメス3世王名表⁵³⁾、アビュドスのセティ1世王名表⁵⁴⁾、同じくアビュドスのラムセス2世王名表⁵⁵⁾、サッカラの貴族テンロイの墓王名表⁵⁶⁾である。これらは、建造物のレリーフとして作られたものであり、マ

48) J. H. Breasted, *Ancient Record of Egypt*, vol. 1, Urbana, 2001; T. A. H. Wilkinson, *Royal Annals of Ancient Egypt: The Palermo Stone and its Associated Fragments*, London, 2000.

49) Breasted, op. cit., p. 52.

50) 『エジプト史』については、アフリカヌス版、エウセビオス・シンケルス版、エウセビオス・アルメニア版全てに共通する記載である。Waddell, op. cit., Fr. 6-10. パレルモ・ストーンについては、Wilkinson, op. cit., p. 114 (河馬の狩猟), p. 117 (アピス信仰).

51) Dillery, op. cit., p. 177.

52) Verbrugge & Wickersham, op. cit., pp. 103-104.

53) アモン大神殿の祝祭殿の壁にレリーフとして作成された。Cf. B. Porter and R. Moss, *Topographical Bibliography of Ancient Egyptian Hieroglyphic Text, Reliefs and Paintings*, vol. 2, 2nded., Oxford, 1991, p. 112(342). 欠落箇所が多く、明確な解釈が難しい資料である。第1王朝初代メネス（前3100年頃）から始まる王名がヒエログリフで記される。新王国時代第18王朝のトトメス3世（前1504～前1450年）の治世に成立した。他のレリーフの王名表とは異なり第二中間期の第13・第14王朝の王名を含むことが確認されている。Cf. Redford, *Pharaonic King-lists*, pp. 29-34.

54) アビュドスのセティ1世葬祭殿南棟の壁に刻まれる王名表。Cf. Porter & Moss, op. cit., vol. 6, 1991, p. 25(229-230). メネスから第19王朝セティ1世（前1318～前1304年）の76の王名がヒエログリフで記されている。Redford, *Pharaonic King-lists*, pp. 18-20.

55) アビュドスのラムセス2世葬祭殿の壁に刻まれる王名表。Cf. Porter & Moss, op. cit., vol. 6, 1991, p. 35(27). メネスから第19王朝の78の王名がヒエログリフで記されている。これはセティ1世王名表に息子ラムセス2世（前1304～前1237年）自身のカルトゥーシュ2つを付け足したものである。Redford, *Pharaonic King-lists*, pp. 20-21.

56) CG 34516; Porter & Moss, op. cit., vol. 3, 2nded., 1994, p. 666. ラムセス2世からイアフメス（前1570～前1546年）まで遡って記述している。ラムセス2世治世の成立とされ、貴族の墓壁画に残る王名表であり、58の王名がヒエログリフで記されていることが確認される。Redford, *Pharaonic King-lists*, pp. 21-24.

ネトンが第1王朝で示すのと同様に、メネスから始まる歴代の王の連続を描いている。王名表の傍らに配置された王（もしくは墓の主）は、歴代の王の名に向けて祈りの体勢をとる。これは歴代の王たちに対する敬意を示しており、王には自身を過去のファラオたちに連ねることでその王権の正統性を掲示する目的があった。そのため、これらレリーフの王名表には正統性を示すに相応しくない、すなわち「ファラオ」として認めがたい王の除外が確認される。除外されるのは、第二中間期にエジプトを侵略したヒクソスや、女性でありながら王位を継承したハトシェプスト（前1503～前1482年）、従来のエジプトの多神教を否定し「アマルナ革命」で一神教を提唱したアクエンアテン（アメンホテプ4世）（前1379～前1362年）周辺の王たちである⁵⁷⁾。一方『エジプト史』では、これらの王たちは削除されることなく記録されており、この箇所においてマネトンが別の史料に頼ったことが分かる。

レリーフの王名表とは異なる性質を持つのが、ラムセス2世治世成立のトリノ王名表である。これは通称「トリノ・パピルス」の裏面にヒエラティック（神官文字）で書かれたもので、表面には個人名や法令名、課税状況が記されており、神殿所蔵の行政文書であると考えられている⁵⁸⁾。王朝時代のエジプト神殿は、宗教的側面の他に経済的側面を担っており、産業活動における生産管理や賃貸借の契約証書等を扱った。トリノ王名表は、それらの契約や証書の日付を記すために年代的根拠として使用された史料であると考えられ、上記4点のレリーフの王名表のように、見る者の認識を操作するような意図を含まない。そのため、神話の時代からの君主について300名以上の王名が記録され、その中には他の王名表では削除されるヒクソスについての記述も確認することができる。扱う王名数や、王たちのグルーピング、さらに各王の治世年数を記載するなど、トリノ王名表は『エジプト史』との類似点を指摘することができる⁵⁹⁾。しかし、王のグルーピングについては、『エジプト史』の第1～5王朝を「メネスの家系」、第6～8王朝を「ジェド・スウトの王たち⁶⁰⁾」、第9・10王朝を「ヘラクレオポリスの王たち」とするなど『エジプト史』よりも大まかな括りである。さらに、そのグルーピング自体を特定の語句を用いて定義していない、すなわち、マネトンのように「王朝」といった語句を使用しないなど、『エジプト史』との違いも指摘される⁶¹⁾。

ヨセフスの証言する「聖なる書字板」とは、上記のような王朝時代の史料を指すと考えら

57) トトメス3世王名表は保存状況が悪く、それぞれの王名の確認が困難である。しかし他の王名表と異なり、唯一第二中間期の第13・第14王朝が確認される。またアマルナ期はトトメス3世の後の時代であるため、ここでは記録されていない。アビュドスのセティ1世王名表とラムセス2世王名表、サッカラの王名表は、第二中間期、ハトシェプスト、アマルナ周辺の王たちが削除されている。

58) 「トリノ・パピルス」は断片的にしか発見されておらず、所々欠落がある。Redford, *Pharaonic King-lists*, pp. 1-18; Verbrugge & Wickersham, op. cit., pp. 105-106.

59) トリノ王名表と『エジプト史』の類似点については Waddell, op. cit., p. xxii; Gardiner, *Egypt of the Pharaohs*, pp. 47-48; Verbrugge & Wickersham, op. cit., pp. 105-6. が指摘する。

60) ジェド・スウトとは、メンフィス周辺の地域を指すと考えられる。Cf. Redford, *Pharaonic King-lists*, p. 13, p. 148.

61) Redford, *Pharaonic King-lists*, p. 13.

れる。しかし以上で論じたように、パレルモ・ストーンについては第5王朝までの扱いであり、レリーフの王名表4点については王の削除が行われているため、マネトンがこれらのみを情報源にしたとは考え難い。トリノ王名表については、最も『エジプト史』との類似点を指摘できるが、王たちのグルーピングがマネトンよりも大まかに設定されていることから、マネトンがさらに細かな括りで設定された王名表を参考にした、もしくはトリノ王名表のような神殿所蔵史料を参考にし、自身でグルーピングを行ったと考えられる。Redfordは『エジプト史』をこうした王朝時代の王名表の系譜に連ねながらも、その主だった情報源としてはトリノ王名表のような神殿所蔵史料の類が活用されたと推測する⁶²⁾。どちらにせよ、「王朝 *δυναστεία*」という語句を用いた王たちのグループの定義づけは、Verbruggeや Wickershamが述べるように、マネトンの『エジプト史』が初出であると言える⁶³⁾。

マネトンが『エジプト史』において意図的な「王の削除」を行わなかったということからは、彼の執筆目的が、レリーフの王名表とは異なることが分かる。先述のように、レリーフの王名表は、王朝時代の王権概念に則した「正しい」歴代の王を提示することで、王の威信を示す意図を持っていた。ギリシア世界に目を向けると、マネトンよりも前に歴史叙述を行ったヘロドトスは、著書の冒頭で「人間界の数々の事跡が忘れ去られることを恐れて書き述べた」と記し、またトゥキュディデスは彼が取り上げたペロポネソス戦争について「語るべき戦争である」として執筆目的を読者に伝える⁶⁴⁾。マネトンの『エジプト史』には、この2名のように執筆目的を示す記述は確認できない。しかし、王の削除を行わずエジプトの通史を語ったその姿勢からは、これらギリシアの歴史家と同じく、マネトンが「事実」と考えた「エジプト史」を示す目的を持っていたことが伺える。

マネトンの「事実」を伝えようとする執筆姿勢は、彼によるヘロドトスの訂正からも確認できる。ヘロドトスは著書において、エジプトの歴史を語る⁶⁵⁾。その中で彼はエジプトの初代の王をミン、大ピラミッドの建設者をケオプスと述べる⁶⁶⁾。しかしマネトンは同一の王について、初代をメネス、大ピラミッドの建設者はスーフィスであると述べる⁶⁷⁾。この2箇所マネトンは敢えて「ヘロドトスが言うところの…」と述べ、ヘロドトスとは別の名称を使用することを表明している⁶⁸⁾。すなわち、マネトンはヘロドトスの先例に従わず、本来エジプト語で記される王名を独自にギリシア語へ翻訳しているのである。

62) Redford, *Pharaonic King-lists*, p. 336.

63) Verbrugge & Wickersham, *op. cit.*, p. 98.

64) Hdt., 1; Thuc., 1, 1. Cf. 桜井万里子『ヘロドトスとトゥキュディデス—歴史学の始まり』山川出版社, 2006年, 19-25頁。

65) ヘロドトスは初代のミンから第26王朝のアマシスまでを扱う。Hdt., 2, 99-162.

66) ミンについては Hdt., 2, 99, ケオプスについては Hdt., 2, 124-126.

67) メネスについてはマネトンの第1王朝 (Waddell, *op. cit.*, Fr. 6-7), スーフィスについてはマネトンの第4王朝 (Ibid, Fr. 14-16).

68) 第1王朝メネスの項ではエウセビオスのシンケルス版とアルメニア版のみがヘロドトスについて記載, 第4王朝スーフィスの項ではアフリカヌス, エウセビオス両版共にヘロドトスの名前を出している。

また、マネトンとヘロドトスの記述を比較すると、両者に時系列の食い違いを確認することができる。両者に共通する「三大ピラミッドの建設者たち」、「セソストリス」、そして「十二王」による「「迷宮」の建設」の3箇所の記事を比較してみよう。現在、「三大ピラミッドの建設者たち」は第4王朝（前2589～前2504年）、「セソストリス」は第12王朝のセンウセレト3世（前1878～前1843年）、「迷宮」の建設はセンウセレト3世の息子アメンエムハト3世（前1842～前1797年）のピラミッド複合体を指すと特定されており、マネトンの時系列はこれと一致するものである⁶⁹⁾。しかし、ヘロドトスはこれらについて、「セソストリス（ヘロドトス、『歴史』、第2巻、102節）」、「三大ピラミッドの建設者たち（同上、第2巻、124-129節）」、そして「十二王」による「「迷宮」の建設（同上、第2巻、148節）」の順にエジプトの歴史の中に挿入しており、誤った時系列で配置していることが分かる。これについて Moyer や Dillery は、マネトンが『エジプト史』で「正しい歴史」を記したことで、ヘロドトスの名前を出さずとも暗に彼を訂正したと指摘する⁷⁰⁾。『エジプト史』の記述から、マネトンがヘロドトスとその著書の存在を認識していたのは確かであり、彼はヘロドトスの示す誤った王の時系列も目にしたはずである。ヘロドトスの名前が登場する項目において、上記の2人が指摘するような「意図的な」訂正がマネトンによって行われたかは断定できない。しかし、彼が先例であるヘロドトスの記述を踏襲しなかったという事実からは、王朝時代から引き継がれた過去の情報を自分自身の解釈で記そうとした姿勢、すなわち、エジプト人として「正しい」自国史を語ろうとした彼の意志を読み取ることができるのではないだろうか。

マネトンの『エジプト史』が、長らく王朝時代の王名表の翻訳物として認識されてきたことは「はじめに」で述べた通りである。しかし、その内容を実際の王名表と比較すると、王朝時代の王権概念に左右されない、「事実」としての歴史を伝えようとしたマネトンの執筆姿勢を読み取ることができる。また、ヘロドトスとの比較からは、マネトンがヘロドトスの『エジプト史』に誤りがあることを見抜いており、それに従わなかったことが分かる。つまり、マネトンはエジプトの歴史記録やギリシア人による歴史記述を認識しながらも、それをそのまま引き継ぐのではなく、自身の価値観に基づいた「正しい」歴史の執筆を試みたのだと言える。

第2節 『エジプト史』におけるギリシア世界の記述

『エジプト史』は、先述のようにエジプトを統治した王を中心に展開される。その中には、第1章第2節の下線部(f)で示したように、ギリシア世界に関する記述を確認することができる。従来このような記述について、Redford は、マネトンがエジプトの通史の中に「ギリシ

69) マネトンは第4王朝に「三大ピラミッドの建設者たち」、第12王朝3代目に「セソストリス」、同王朝4代目に「迷宮」の建設を位置づけている。

70) Moyer, op. cit., pp. 109-110; Dillery, op. cit., pp. 89-93.

ア世界の事象を組み込んだ⁷¹⁾」と述べ、Verbrugge と Wickersham は、後世の引用者による加筆である可能性を指摘しながらも、真にマネトンの記述であるならば、彼のギリシア教養の証拠であると述べる⁷²⁾。しかし、これらの興味深い指摘は僅かに触れる程度に留まっており、それ以上の具体的な考察対象へと展開していない。「はじめに」で述べたように21世紀に入り、Dillery や Moyer がこのギリシア世界に関わる記述に改めて着目しており、『エジプト史』の新たな側面が考察され始めている。本節ではこの2名の研究を参照しつつ、『エジプト史』におけるギリシア世界についての記述の性質を検討していく。

『エジプト史』において、ギリシア世界の事象が確認できるのは表③の9箇所である。この中でも、No. 3 のメムノンの巨像については先述の通り後世の加筆である。そのため、No. 3 を除外して分類すると、次の二つの傾向が見出せる。第一に、エジプト人をギリシア世界の人物とする記述 (No. 1, 4～6, 9) である。No. 4～6を見ると、特定の人物についてギリシア世界での呼称を提示している。例えば No. 4 のアルマイスは、「ダナオスとも呼ばれた」と記される。ダナオスは、ギリシア世界において No. 5 の兄弟アイギュプトスとの王位争いの末、アルゴスで王となったとされる伝説上の人物である。このように No. 4～6 では、ギリシア世界で知られるエジプト人について、ギリシアでの別称を明示し、その二つの名前を持つ人物が同一人物を指すことを述べる。

No. 4～6 に対して、No. 1, 9 は性質が異なる。No. 1 でアスクレピオスと呼ばれるイムホテップは、ジェセル王 (前2667～前2648年) の宰相であり、サッカラの「階段ピラミッド」の設計者として知られる。彼は建築・医学・書記法の知識を持つことで王朝時代を通じて有名であり、後に神格化され、その崇拜はプトレマイオス朝にも確認されている⁷³⁾。これらの特徴からイムホテップはギリシアの半神アスクレピオスと同一視された。また No. 9 のオソルコーは、オソルコン 3 世 (前787～前759年) と同定される⁷⁴⁾。オソルコン 3 世はカルナックにコンス神殿を建設しており、その業績からエジプトの神コンスと同一視されるヘラクレスとして表されたと考えられる⁷⁵⁾。すなわち、No. 1, 9 は対象人物に対してエジプト人が持つ認識を基に、その特性からギリシア世界の半神に置き換えていると言える。これについて Dillery と Moyer は、ギリシア語話者である読者へ対象の具体像を示すことを目的としたと指摘する⁷⁶⁾。つまり、あくまでも対象人物の特徴を示したものであり、ギリシア世界の半神との同一視を示す記述ではない。このように、ギリシア世界の人物の挿入は、それが同

71) Redford, *Pharaonic King-lists*, p. 336.

72) Verbrugge & Wickersham, op. cit., p. 108.

73) W. S. Smith, *The Old Kingdom in Egypt and the Beginning of the First Intermediate Period, The Cambridge Ancient History*, 3rded., vol. 1, part 2, Cambridge, 1971, p. 145; プトレマイオス 2 世によってフィラエ島にイムホテップを祀る小神殿が建設された。Cf. Waddell, op. cit., p. 41, n. 4.

74) Waddell, op. cit., p. 160, n. 2; Redford, *Pharaonic King-lists*, p. 310. Verbrugge と Wickersham はこの王をシェションク 4 世 (前793～前787年) と同定するが、王名や即位順、その業績から、オソルコン 3 世と同定する見解が一般的である。Verbrugge & Wickersham, op. cit., p. 201.

75) Redford, *Pharaonic King-lists*, p. 212, n. 38, p. 313; Moyer, op. cit., pp. 108–109, n. 86.

76) Moyer, op. cit., p. 109; Dillery, op. cit., pp. 110–111.

一人物を示すものであれ、特徴を示すものであれ、該当の人物についてギリシア世界の読者により身近に感じさせる効果を狙ったものと言える。

第二に、No. 2, 4, 7, 8はギリシア世界の出来事に関する記述である。これらは、ギリシア世界において明確な年代が特定されない出来事である。特に、No. 2「デウカリオンの洪水」はゼウスの人間に対する怒りから引き起こされたギリシア世界における洪水伝説であるが、マネトンよりも前のギリシア語著作においてその年代が特定されることはない⁷⁷⁾。またNo. 6「ポリュボス」や、No. 7「トロイアの陥落」についての記述は、明らかにマネトンがホメロスを意識していることが分かる。この点について、Dilleryはホメロスによって年代が確定されることのなかった「穴」を、マネトンが初めて活用したと述べる⁷⁸⁾。すなわち、マネトンは年代が特定されないギリシア世界の事象を、エジプトの歴史上に位置づけることで、明確な年代を読者に提示しようと企図したというのである。

さらにDilleryが指摘するように、No. 4, 8, 9はプトレマイオス朝との関連が見られる。ここに登場するヘラクレスはプトレマイオス朝の父方の祖先にあたとされた神であり、さらにアルゴスはヘラクレスの母アルクメネーの出身地である⁷⁹⁾。つまりNo. 4, 9では、王朝の祖とするヘラクレスと過去のファラオとの関連が示されていると言える⁸⁰⁾。またNo. 8のオリュンピア競技祭の第1回開催の記述に関しては、プトレマイオス2世の支援を受けた詩人ポセイディッポスが、プトレマイオス王家所有馬のオリュンピア競技祭での活躍を描き、プトレマイオス1世の時代から積極的に王家がこの競技祭に参加していたことを伝えている⁸¹⁾。さらにDilleryはNo. 8について、プトレマイオス朝の王朝祭祀プトレマイエシアとの関連を指摘する⁸²⁾。王朝祭祀プトレマイエシアは、島嶼同盟の「ニクリア布告」によって、オリュンピア競技祭と同等の地位が認められた祭典である⁸³⁾。すなわち、プトレマイオス朝

77) Hdt., 1, 56; Pind. *Ol.*, 9, ll. 43–53; Hes, *Cat.*, FF2–7において、年代を特定する記述は確認できない。

78) Dillery, op. cit., p. 105.

79) プトレマイオス3世治世の第3次シリア戦争の勝利を記念した通称「アドゥリス碑文」には以下の記述が確認される。「プトレマイオス（1世）と妃ベレニケの救済神（テオイ・ソテレス）の子、プトレマイオス（2世）と女王アルシノエの姉弟神（テオイ・アデルフォイ）の息子、偉大なプトレマイオス（3世）は父方をゼウスの息子ヘラクレス、母方をゼウスの息子ディオニュソスからの血筋を引く。…（筆者訳）」（OGIS. 54）また、プトレマイオス2世治世下で活躍した詩人テオクリトスも王家の血筋について作品中で次のように伝える。「アレクサンドロスもプトレマイオスも系譜はヘラクレスまでさかのぼる。（古澤ゆう子訳『牧歌』京都大学学術出版会、2004年）」（Theoc., *Idyll.*, 17.）

80) Dillery, op. cit., p. 109.

81) D. J. Thompson, Posidippus, Poet of the Ptolemies, *The New Posidippus: A Hellenistic Poetry Book*, Oxford, 2005, pp. 273–274.

82) Dillery, op. cit., p. 105.

83) Syll³. 390. プトレマイエシアの開催年については、『ニクリア布告』にプトレマイオス2世の妻アルシノエ2世に関する記述が確認できないため、プトレマイオス2世結婚（前274年）前であるとする前279/8年開催の意見（F. W. Walbank, Two Hellenistic Processions: A Matter of Self-definition, *Scripta Classica Israelica*, 15, 1996, pp. 119–130; D. J. Thompson, Philadelphia's Procession: Dynastic Power in a Mediterranean Context, in L. Mooren(ed.), *Politics*,

にとってオリュンピア競技祭は、自身の王朝祭祀の権威を裏付けるものである。マネトンは、こうしたプトレマイオス朝のオリュンピア競技祭を重要視する姿勢を、No. 8の記述に反映させたのではないだろうか。

以上のNo. 1～9のギリシア世界に関する記述は、先述の王朝時代の史料からは確認されることがない。つまり『エジプト史』のこの箇所については、「聖なる書字板」からの訳出とは言いがたく、マネトンが他のギリシア世界の文献を参照し、その情報を『エジプト史』の中に入れ込んだと言える。ここから、マネトンの持つ知識がエジプト内に留まらずギリシア世界にまで広がるものであり、彼がそれらの人物や出来事をエジプト史のどこに位置すると認識していたかが伺える。この点に関して Dillery は、No. 2, 7, 8のギリシア世界に関する記述を、エジプトとギリシア世界との「シンクロニズム」として捉える⁸⁴⁾。彼の述べる「シンクロニズム」とは、別々のコミュニティー、ここではエジプト国内とギリシア世界での、同時発生的な事象を指す⁸⁵⁾。Dillery によれば、このような「シンクロニズム」を提示するマネトンの目的は、エジプトの歴史をギリシアに対して優位に置くためであった。彼はこれを「競争的なシンクロニズム」と表現し、マネトンがエジプトの歴史の古さを際立たせようと試みたと論じている⁸⁶⁾。

これらの「聖なる書字板」に由来しない記述には、著者マネトンの『エジプト史』に記載すべきとする意志が反映されていることは疑いない。ギリシア世界に関する記述について、マネトンが無造作に人物や出来事を著作の中に織り交ぜたとは考えにくい。それよりも彼はそこに、読み手となるギリシア語話者への意識、そして支配王権との関連性を含ませたと推測する方が妥当である。そう考えると、ギリシア世界に関する記述が元々9箇所のみであったとは言い難い。「大要」は後世の作家によって内容が要約されたものであり、本来の『エジプト史』はヨセフスの引用のように、各王の治世について散文的に詳細を述べた長大なものであったと考えられる。すなわち、引用の過程で、ギリシアに関する記述は大幅に削除されたのであり、本来の『エジプト史』では、さらに多くのギリシア世界に関する事柄が記されていたと推測できるだろう。

このように考えると、マネトン『エジプト史』のオリジナル・テキストには「歴史叙述」としての性格を見ることができるといえる。大戸千之によれば、王朝時代の王名表の作成は「歴史を書く」行為の前段階、すなわち「歴史記録」にすぎず、「歴史叙述」とは「書く人間の主体

Administration and Society in the Hellenistic and Roman World, Leuven, 2000, pp. 365–388) と、祭典に第一次シリア戦争(前274～前271年)の勝利を祝っている要素が確認できるため前271/0年開催の意見(F. Dunand, *Fête et propagande a Alexandrie sous les Lagides*, *La Fête, pratique et discours: d'Alexandrie hellénistique a la Mission de Besançon*, Paris, 1981, pp. 13–40) や波部雄一郎「プトレマイオス2世による祭典行列の年代について—エジプトにおけるディオニュソスの技芸人を中心に—」『関学西洋史論集』26, 2003年, 29–42頁)がある。

84) デウカリオンの洪水については、Dillery, op. cit., p. 108; トロイアの陥落については、Ibid., pp. 105–107; オリュンピア競技祭の初回開催については、Ibid., p. 99.

85) Ibid., p. 98.

86) Ibid., p. 109.

的な問題意識と判断に立った説明」であるという⁸⁷⁾。この定義によれば、『エジプト史』はそれらの王名表とは性格が異なり、マネトンは「正しい」歴史を記すべく、彼自身の価値判断に基づいて情報を採用することで、エジプトについての「歴史叙述」を試みたと言えるのである。

第2章第1節で述べたように、マネトンはヘロドトスの記述内容について、その全てを承認しているわけではなかった。それは彼がヘロドトスの記述に明白な誤りがあることを認識しており、彼の考える「正しい」歴史と一致しなかったためであると考えられる。すなわち、マネトンはエジプト・ギリシア双方の文化に精通する自身の教養を存分に生かし、エジプトについて、聞き知った情報に基づくヘロドトスの記述に頼るのではなく、王朝時代の「歴史記録」に直接アクセスし情報を求めた。その上で、彼はギリシアの「歴史叙述」的な伝統も取り入れて、『エジプト史』を執筆したのである。マネトンの「歴史を書く」直接の目的が、ヘロドトスを訂正することにあったとは断定できない。しかし、ヘロドトスによって「歴史叙述」の先例が示されたことで、マネトンは『エジプト史』執筆についての着想を得たと考えられる。すなわち、『エジプト史』は、ギリシアの「歴史叙述」の流れをヘロドトスから批判的に継承しつつ、エジプトの「正しい」歴史を提示した初めての作品であると言える。

さらに、マネトンが「エジプト」史にギリシア世界の事象を含めたことは、彼が執筆対象として捉えた範囲を示唆している。第1章第2節で確認したように『エジプト史』が「ファラオ」を軸に展開する構成であったことから、マネトンがこの著作で王朝時代のエジプトの歴史を描こうとしていたことは明確である。しかし、既にギリシア世界の知識を身に着けていたマネトンは、「歴史叙述」を行う上で自身が享受した文化の歴史として、ギリシア世界の事象についての言及を避けることができなかつたのではないか。すなわち、マネトンが著作で扱う範囲は、彼自身の文化的背景を反映しており、それは従来の「エジプト」を示すナイル川流域に留まらず、ギリシア世界にまで広がっていたことを示すのではないだろうか。

おわりに

従来、『エジプト史』はエジプト古来の歴史記録の「翻訳書」として認識されてきた。これは、マネトンのオリジナル・テキストが存在しないこと、引用者であるヨセフスが、「マネトンは『エジプト史』を聖なる書字板から訳した」と証言したこと、さらに、エジプト学において時代区分の基盤として重用されてきたことに起因する。そのため『エジプト史』は、エジプトの「歴史記録」としての認識に留まり、議論の対象から外される傾向にあった。

特に、ギリシア世界に関する記述は現存する『エジプト史』の断片の中では僅かな分量であり、長らく軽視されてきた。しかし、これらの記述は、ヨセフスの示す「聖なる書字板」、

87) 大戸千之『歴史と事実—ポストモダンの歴史学批判をこえて』京都大学学術出版会、2012年、18-20頁。

すなわち王朝時代の王名表からは確認されない情報に由来する。つまり、ギリシア世界に関する記述からは、マネトンが単に「歴史記録」を翻訳したのではなく、彼が自身の価値観に基づき「歴史を書いた」ということが分かる。彼は、いわゆる「歴史叙述」を試みたのである。つまり、ギリシア世界についての記述へ着目することで、はじめて「歴史叙述」としての『エジプト史』の本質を捉えることが可能になるのである。

マネトンのヘロドトスへの認識は、「歴史叙述」という点において、マネトンに『エジプト史』執筆の着想を与えたと言える。マネトンは、エジプト文化について著作を執筆するほどの十分な知識を持ち、また一方で、ヘロドトスを訂正するほどのギリシア的教養をも身に着けた人物であった。この二つの側面が彼の『エジプト史』に反映されており、マネトンとヘロドトス両者の叙述内容の違いを明確にしている。すなわち、マネトンは、二つの文化に精通した自身の利点を生かして、ヘロドトスとは異なる「歴史叙述」を目指したと言えるだろう。

ギリシアからヘレニズム期における「歴史叙述」の流れに着目すると、マネトンの『エジプト史』は、エジプトにおける「歴史記録」から、「歴史叙述」への過渡期に位置づけられると言える。「正しい」歴史を記そうとしたマネトンの執筆姿勢には、彼に先立つギリシアの著作家トゥキュディデスとの類似点があるように思われる。さらに、前1世紀のディオドロスによる引用によって、マネトンと同時代に、アブデラのヘカタイオスが同名の『エジプト史』を執筆したことが伝えられる⁸⁸⁾。マネトンの『エジプト史』は、このようなギリシア世界の歴史叙述との比較が可能であり、これによって、マネトンをギリシアの「歴史叙述」の流れに新たに位置づけることができると筆者は考えている。この点については今後の課題としていきたい。

マネトンが自国史を語るにあたり、ギリシア世界の事象を含めたことから、彼の自国に対する認識が従来のもとは異なり、地中海を超えたギリシア世界にまで拡張されていたと読み取ることができる。これには、マネトンのギリシア的教養が背景として影響したと考えられる。彼にとって、過去のギリシア世界の事象は自身の教養を形成する一部であった。また、主にヘレニズム朝の支配者層の文化的背景となるギリシア世界の事象は、当時のプトレマイオス朝の文化的基盤を形成するものでもある。新王権下で二つの文化の橋渡しの役割を担ったマネトンにとって、ギリシア世界の事象は無視できるものではなかったであろう。彼はすでに地中海世界という枠組みの一部として自国を認識しており、彼にとってギリシア世界の事象は、自国史を語る上で必要不可欠な要素であった。すなわち彼は、「歴史叙述」を行うことで、従来とは異なり、王朝時代のエジプトを東地中海という大きな文脈の中で描こうとしたのではないか。我々は、『エジプト史』を「歴史叙述」として捉え直すことで、ヘレニズムを生きた個人による王朝や新たな枠組みの世界の捉え方を、ひいては、ヘレニズム時代の一つの特質を見ることができるのではないだろうか。

88) Diod. Sic., 1, 10-98; Cf. Brill's New Pauly ; *Encyclopaedia of the Ancient World*, vol.6, Leiden, 2002, p. 37.

表① 王朝時代区分表

参照：Cambridge Ancient History 3rded, vol. 1. part 2-vol. 6, Cambridge, 1971-1994.

時代区分	王朝区分	年代
初期王朝時代	第1王朝	前3100 - 前2890年頃
	第2王朝	前2890 - 前2686年頃
古王国時代	第3王朝	前2686 - 前2613年頃
	第4王朝	前2613 - 前2498年頃
	第5王朝	前2494 - 前2345年頃
	第6王朝	前2345 - 前2181年頃
第一中間期	第7王朝	前2181 - 前2173年頃
	第8王朝	前2173 - 前2160年
	第9王朝	前2160 - 前2130年頃
	第10王朝	前2130 - 前2040年頃
中王国時代	第11王朝	前2133 - 前1991年頃
	第12王朝	前1991 - 前1786年
第二中間期	第13王朝	前1786 - 前1633年
	第14王朝	前1786 - 前1603年頃
	第15王朝	前1674 - 前1567年
	第16王朝	前1684 - 前1567年頃
	第17王朝	前1650 - 前1567年頃
新王国時代	第18王朝	前1567 - 前1320年
	第19王朝	前1320 - 前1200年
	第20王朝	前1200 - 前1085年
第三中間期	第21王朝	前1085 - 前945年
	第22王朝	前945 - 前715年頃
	第23王朝	前818 - 前715年頃
	第24王朝	前727 - 前715年頃
	第25王朝	前747 - 前656年頃
末期王朝時代	第26王朝	前664 - 前525年
	第27王朝	前525 - 前404年頃
	第28王朝	前404 - 前398年頃
	第29王朝	前398 - 前379年頃
	第30王朝	前379 - 前343年頃
	第31王朝	前342 - 前332年

表② 『エジプト史』 抜粋 参照：W. G. Waddell. *Manetho*, Cambridge, MA., 1940.

アフリカヌス

王朝	出典 (Waddell)	代	王名	拠点	治世 年数	出自	特記
15	Fr. 43	1	サイテース	セスロイト	19	フェニキア	サイテ州の由来
		2	ブノーン				
		3	パクナン				
		4	スタアン				
		5	アルカレース				
		6	アフォーフイス				
16	Fr. 45						再び羊飼いの王たち。32人。518年間統治。
17	Fr. 47			テーブもしくは ディオスポリス			羊飼いの王たちが 43人。テーブもし くはディオスポリ スの王たちが43人。 羊飼いの王たち、 テーブの王たちの 合計は151年間。

エウセビオス (E, Ea 共通)

王朝	出典 (Waddell)	代	王名	拠点	治世 年数	出自	特記
15	Fr. 44			ディオスポリス	250		統治250年間。王 数の記載なし。
16	Fr. 46			テーブ			5人。190年間統 治。
17	Fr. 48			セスロイト	103	フェニキア	羊飼いとその兄弟。 外国人でありメン フィスを征服した。
		(1)	サイテース		19		サイテ州の由来。 セスロイト州に町 を創設し、エジプ ト征服の基盤とし た。
		2	ブノーン		40		
		3	アフォーフイス		14		
		(4)	アルクレース		30		

E= エウセビオス・シンケルス版
Ea= エウセビオス・アルメニア版

表③ 『エジプト史』ギリシア世界の記述 参照：W. G. Waddell. *Manetho*, Cambridge, MA., 1940.

No.	Waddell, Fr.	王朝	代	王 名			ギリシア世界の関連記述
				A	E	Ea	
1	11・12 (a)・12 (b)	3	2 (A, E, Ea)	トソルソロス	セソルトウス	ソソルトウス	宰相イムホテップがアスクレピオスと称される。(A, E, Ea)
2	52・53 (a)・53 (b)	18	6 (A, E, Ea)	ミスフラグムートーシス	ミスフラグムートーシス	ミスフラムトシス	デウカリオンの洪水 (Aのみ)
3	Ibid	18	8 (A) / 7 (E, Ea)	アメノーフェイス	アメノーフェイス	アメノフェイス	「メムノンの巨像」(A, E, Ea)
4	Ibid	18	14 (A) / 12 (E, Ea)	アルメシス	アルマミス	アルマミス	ダナオスと呼ばれる。アルゴスの統治 (E, Ea)
5	Ibid	18	15 (A) / 13 (E, Ea)	ラメッセース	ラメッセース	ラメッセース	アイギュプトウスと呼ばれる。(E, Ea)
6	55・56 (a)・56 (b)	19	6 (A) / 5 (E, Ea)	トゥオーリス	トゥオーリス	トゥオリス	ホメロスに登場するポリュポスの同一人物」である。(A, E, Ea)
7	Ibid	19	同上	同上	同上	同上	トロイアの陥落 (A, E, Ea)
8	62・63 (a)・63 (b)	23	1 (A, E, Ea)	ペトゥーバーパテース	ペトゥーバーパステイス	ペトウバステイス	オリュンピア競技祭の初回開催 (A)
9	Ibid	23	2 (A, E, Ea)	オソルコー	オソルトーン	オソルトン	ヘラクレスと称される。(A, E, Ea)

A=アフリカス版
 E=エウセビオス・シンケルス版
 Ea=エウセビオス・アルメニア版